



春日小だより

令和7年6月30日
練馬区立春日小学校
校長 後藤 京子
学校通信 7月号

喉元過ぎれば

副校長 市 村 大

6月23日、6年生が岩井移動教室に出発し、校長先生も引率で行かれたので、全校朝会では、校長先生に代わって私が話をさせていただきました。食育月間にちなんで、私の食の経験などについて話したのですが、私が苦手な食べ物も話してしまったので、全校児童にばれてしまいました。気になる方は子供たちから聞いてみてください。

誰にでも、何かしら苦手な食べ物はあると思います。こればかりは、仕方ないでしょう。どうしても苦手なものを食べろとは言いません。無理強いする方が、はるかに悪影響が大きいです。また、近年ではアレルギーの問題もありますね。この話は好き嫌いとは次元が違います。好みの問題ではなく、体質の問題です。下手をすれば命にかかわる案件ですから、食の指導とは一線を画して考える必要があります。

そういった前提のもとで、改めて食について考えていきたいと思います。最近、SNS上での「映え」のために、飲食店で大量に注文した料理を、写真や動画に収めた後、ほとんど食べないで残していく人が少なからずいるようです。それに対して店側が咎めると、「お金を払ったのだから問題ない」という回答が返ってくるとのこと。その人たちの理屈では、「お金を払ったのだから料理は自分たちのもの。それをどうしようが自分たちの裁量だ。」ということなのでしょう。まあ、言い分は理解できます。しかし、あえて学校だよりの巻頭言にふさわしくない言葉で表現するなら「大バカ者」です。少なくとも、私はそういう価値観の人間とは付き合いません。向こうも、私のような人間はご免でしょう。それで結構です。折り合いがつけられない人間と無理にかかわる必要はないです。

ただし、これは対大人の話です。私たちは教育を通して、そういった価値観をもたない人間を育てていくことが使命です。子供たちがそういう発言や行いをすれば、全力で指導します。食材を粗末にして何とも思わないのは、他者の痛みが分からないことと同等です。命を踏みにじる行為です。食事をするときには「いただきます」、致し方ない理由で料理を残してしまうときには「もったいないけどごめんなさい」と、自分の心の中で思える人間になってほしい。苦手な食材であっても、できる限り食べる人間になってほしい。それが心の豊かさにもつながります。極論、食の経験を豊かにすることは、人生を豊かにすることにもつながります。

人類の歴史を見れば、それは食材の確保の歴史とも言えます。日本に限らず、ほとんどの国・地域で、豊かな食に恵まれた時代なんてほとんどありません。たまたま、今の日本は豊かな食に恵まれています。これがいつまでも続く保証はないのです。十分に食材が手に入らなくなっても「これは嫌いだから食べない」「まずいからいらない」「お金払ったんだから無駄にしても問題ないだろ」と言いますか？80年前、終戦直後はこんな考えはなかったはず。現在は、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の真っ最中のように感じます。このままなら、いつか手痛いしっぺ返しがくると思います。そうならないためにも、今一度全員が、食に対する感謝の気持ちを思い出していきましょう。